HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	坂井昭宏・柏葉武秀編『現代倫理学』
Author(s)	吉谷, 啓次
Citation	哲学, 46, 33(右)-37(右)
Issue Date	2010-03-21
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/45268
Type	bulletin (article)
File Information	aphhu.pdf

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

《書評》

坂井昭宏・柏葉武秀編『現代倫理学』

（ナカニシヤ出版、二〇〇七年）

吉谷　啓次

本書の奥付を見るかぎり、いささか新鮮さを失いつつあるという感じはまぬがれないが、それにしてもまずは、本格的な現代倫理学の教科書が誕生したことを喜びたい。倫理学研究の現状に対応した教科書、つまりは一人の倫理学者の教説の解釈、再解釈に終始する（このことじたいが真摯な倫理学研究のひとつのスタイルのであることは言うまでもないことではあるが）のではなく、われわれが抱えている具体的な倫理的な問題についての研究としての倫理学研究が現在どのように進められているかについてのある程度の見通しを与えてくれる教科書は、皆無とは言わないまでも、そうは多くはなかったような気がするのである。ひるがえって、倫理学という言葉を含む名称の講義や演習をみずから行いながら、あるいは同僚たちがそれを傍らで行っているのを見ながら、われわれはそれをどう感じているだろうか。この授業が、あるいはその授業が倫理学のもともとのありかたとは到底言えないのではないかという違和感をもっている大学の倫理学ないし哲学の教員はわりあい多いのではないだろうか。少なくとも、本書はそうした違和感をかなりの程度やわらげてくれるものであろうと考えられる。「ひとはいかに生きるべきか」という問いに代表される倫理学の問題、あるいは道徳的な問題とは、まずもって、私たち一人ひとりの問題なのである。そうした問題

をみずからの問題として思考していこうとする読者のために、過去の倫理学者たちの思考の軌跡や現在の研究者たちの思考の努力を参照しうるものにする、これは現在の倫理学者の重要な仕事の一つであるだろう。本書はまさにその仕事を全うしようとする試みであり、そしてそれをかなりの程度実現していると考えられるだろう。また同時に、倫理学の問題がそうした他の誰でもない私という個人にかかわる個別性を抱えるものであり、圧倒的な相対化にさらされる可能性をもともとっており、そのかぎりで現在いささかの閉塞感、出口がないという感覚に覆われているという研究状況を本書は如実に反映しており、そうした倫理学研究の臨場感のようなものは、読者に倫理的な思考に求められる切実さと大胆さ、そしてそれを実際に行うことのある種の喜びを伝えているようにも思われる。

それにしても本書の内容は過度とも思われるほどに豊かである。長く見積もっても過去１００年ぐらいまでに時代がほぼ限定されているとはいえ、その当初はいわゆる西洋を中心として展開され、次第に世界全体を巻き込んでいく現代倫理学の議論を可能なかぎり積み込んでいるように思われる。まず本書は、「ひとはいかに生きるべきか」という倫理的な問いがたんに選好（好みや趣味）を問うような無意味な問いなのではなく、倫理学という学問分野が自立性を十全にもっているということを確認する（坂井―敬称略、以下同様）作業からはじめられる。ついで、ヘアにはじまるメタ倫理学の、なかでも非認知主義の帰趨を明らかにしつつ、自然主義への転回という現状の確認が行なわれる（田村）。また、影響力を現在でももちつづけている主要な規範倫理学である義務論、功利主義、徳倫理学の現状を概観したうえで、それがどのように「ひとはいかに生きるべきか」という問いとかかわっていくかを明確化する（都築）。さらに、共同体の構成という政治哲学的な場面で問われる倫理学的な問題を、とりわけアメリカ合衆国でのリベラリズム／コミュニタリアニズムという対立軸で整理しつつ、個人の成立をめぐる議論がおかれている現状を提示してみせる（柏葉）。ついで、アメリカ的文脈を離れたところで、つまりヨーロッパにおいて現代の倫理学的な問題がどのように構成されているのかをレヴィナス、リクール、ハーバーマス、ヨナスを例として挙げ、あえて筆者なり

にまとめてみるなら、道徳的行為者の成立／不成立をめぐる議論が、ある場合には高度化しすぎた現代の科学技術の問題と関連しながら行なわれ、その議論がそのじつアメリカ的文脈とも通底していることが示唆される（大小田、屋良）。そして、生命倫理学と環境倫理学という、いわゆる応用倫理学の議論が現在どこまでを解決し、どこから曖昧なままに放置しているのか、何に眼を向け、何を無視しているのかを、語の本来の意味で、批判する（村上）作業で、本書は終えられている。本書の読者はまずもって、これまで思考されてきたことの豊かさに、思考すべきことの多さに、そしてその奥深さにたじろぐことだろう。しかしそれは悪い兆候ではない。「ひとはいかに生きるべきか」という、誤解を恐れずに言うなら現代において先送りにされることの多い問いと対決する態度としてはまっとうな出発点だと筆者には思われるからである。そうした問いはそれほど単純なものではありえないのである。

本書が示す倫理学の現在がおかれている状況について、筆者の感想めいたことを多少なりとも述べるとすれば、本書が繰り返し語っているのは、個人とか自己とかいわれる道徳的行為者の概念的でも実質的でもある成立／不成立をめぐって、現代の倫理学は、かつてのように、多かれ少なかれ西洋の文化の影響のもとにある（とだけ、ここでは言っておくことにする）ある種の理想的状況を想定して議論することはできず、ある特定の共同体、文化、歴史といったものとの関係のなかでしか議論ができなくなったということである。これはじつはかねてより指摘されていたことなのであるが、事実上も、研究上もそれに巻き込まれているということである。それが善いものであれ悪いものであれ、道徳的行為者がまずもって成立／不成立し、しかるのちに共同体の構成がなされるというシナリオを採用できなくなっている。たとえば、メタ倫理学における最近の自然主義への転回は、倫理的特性をめぐって非認知主義が指摘していた、道徳的判断のもっている行為遂行的な意味の再考と見ることもできるだろう（表出主義にしても表出されているのは、当該の行為に対して道徳的判断を加えるものの情緒にかぎられるものではない）。規範倫理学においても、徳倫理学があらためて注目すべきものとして考えられるようになったのは、まさにそうしたことのあらわれであろ

う。既存の共同体、文化、歴史というものが道徳的行為者をつねにすでに巻き込んでしまっているという議論を無力化して、そうしたもののいわば色の付いていない行為者を前提とすることには理論上も無理があるという自覚が共有されているということのように思われる。政治哲学の場面でも、リベラリズムのある種の後退（この言葉はロールズの転回を指しているが、それをそう呼んでよければという意味で使用している—言葉の使用に関しては以前も以後も同様である）は、リベラリズムが広い意味での西洋的な文化という背景からのがれられてはいないという認識を受容したということであろう。またアメリカ的文脈を離れた哲学的議論の場でも、それが他と区別される個あるいは己であれ、つねに同一でありつづける同であれ、自己同一性をめぐるある種の神話が解体され、他なるものとの交渉のなかでしか道徳的行為者は成立しえないということが再確認されている。また応用倫理学の現代的な状況についての発言においても、高度化しすぎた科学技術という現代特有の状況からはなれて安直に自己決定や個人の欲望を肯定／否定する議論の欺瞞が、文字通り、指弾されている。

「ひとはいかに生きるべきか」という問いは、もはや、あるいはもともと「私はいかに生きるべきか」という問いとはきりはなしえず、その「私」は共同体、文化、歴史といった、かつて「私」の外部に設定され、「私」の成立以後、「私」が受容するとされてきた何ごとかとの関係のなかでしか成立しえないことがあらわになってきているのである。「私」はつねにすでに特定の共同体的で、文化的で、歴史的であり、さらに言えば現代的なのである。しかしこれは、簡単に予想されるように、不毛な文化相対主義のようなものへの撤退を示す悪い兆候なのだろうか。ここでも筆者はそうは考えない。原理としての文化相対主義はおそらく倫理学的な思考の努力のいっさいを歴史的・文化的……な産物に還元し、「ひとは、そして私はいかに生きるべきか」という問いをさほど意味をもたない、たとえば青年期によく見られる問いの一つと見なしてしまうだろう。しかし「ひと」と呼ばれるもの、「私」と語りだされるものとは何かという問いに対する答えが文化相対的事実であることを認めながら、そのうえであらためて「ひとは、そ

して私はいかに生きるべきか」という問いを問うことは、少なくとも倫理的、あるいは道徳的に無意味でも無内容でもない、そう本書は語りかけているように思われる。「ある」をただ受け入れるだけではなく、それに対してなおも「あるべき」を問い、「あるべき」と言いつづけることこそが倫理学であるというきわめて正当な主張がなされているように思われるのである。

本書の編者の一人が言うように、「倫理学はカネになる」のかどうか、それはわからない。私のこれまでの感触ではわずかな金銭という意味でコガネにしかならないような気すらする。しかし、そうであったとしても、倫理学的な問いを立て、それを真摯に思考しぬこうとする行為、つまりは倫理学を研究することにはある確実で明確な意義があると、本書の執筆者たちは確信しているように思われる。だからこそ、本書は執筆され、出版されたのであろう。そしてその根本的な了解を確認するために、本書冒頭の一文は物されているように思われる。他の執筆者たちの、わりあいと無邪気にそれを信頼するすがたを確認するとき、筆者は、本書がすでにして成功した書物であり、倫理学を学ぼうとする、倫理的問題を自分の問題として思考しぬこうとする読者に対して十分な責任を果たしうる一冊であることを信じたい気持ちになるのである。